

英語の比較節に関する指導上の課題

山岡 大基

英文法における比較は、規則体系そのものが複雑であり、その表す意味も表面的な和訳では必ずしもとらえきれない。また、いわゆる定型表現も多い。そのようなことから、比較は学習者にとっては習熟が最も難しい文法項目の1つである。特に比較節 (as 節・than 節) の構造に関しては、規則が複雑的であり、学習上の混乱が生じやすいため、授業等の指導場面において注意深く扱う必要がある。しかしながら、その指導を補助すべき市販の教材における比較節の扱いには不正確なものが多く、学習者の理解が偏ったものになる危険性が高い。本稿では、まず、英語の比較について、学習上の困難となりやすい言語事実を整理する。次に、市販の教材における比較節の扱いを分析し、そこに見られる問題を明らかにする。最後に、以上の議論を踏まえ、英語の比較節を指導するうえでの留意点をまとめる。

1. 比較構造の成り立ち

1. 1. 程度要素の仮定

than 節や as 節といった「比較節 (comparative clause)」を持つ文構造の派生については、学習者向けには次のように説明されることがある。

(1) Ron is as tall as Kent.

(1)の文は Ron is tall. という文と Kent is tall. という文を as ~ as でつないでできたものです。as ~ as の枠組みに tall を入れて、Kent is tall の tall は省略します。as ~ as の後者の as は接続詞なので、節が来ます。

この場合、Kent is tall という文から tall を除いた Kent is を as に続けて Ron is as tall as Kent is. となりますが、is を省略しても意味は通るので Ron is as tall as Kent. でも構いません。

(高沢・豊島・町田 2002:363)

この派生過程は次のように図式化することができる。

(1a) Ron is tall. Kent is tall.

↓ (2文を as ~ as でつなぐ)

(1b) Ron is as tall as Kent is tall.

↓ (2番目の tall は重複しているので省略)

(1c) Ron is as tall as Kent is tall.

↓ (2番目の is も重複しているので省略可能)

(1d) Ron is as tall as Kent (is).

この考え方は、比較の構造的な成り立ちを中学生・高

校生が学ぶ文法の範囲内で説明することができるという点において利便性の高いものであるが、比較文の意味をとらえるうえでは難点もある。

それは、派生の初期段階で、

(1a) Ron is tall. Kent is tall

という2文を想定していることである。独立した文としては、これら2文における tall は程度が高いことを含意する(「ロンは背が高い」「ケントは背が高い」)。

しかし、派生の結果得られる

(1d) Ron is as tall as Kent (is).

にはその含意はない。比較文における形容詞・副詞はあくまで比較のための尺度として機能しているからである。(意味的に tall と対をなす short はこの点で異なり、Ron is as short as Kent (is). と言えば、Ron も Kent も背が低いことが含意される。しかし、Ron is shorter than Kent (is). では、その含意はない。このような形容詞・副詞の性質も、比較への習熟を困難にする一因である。)

この、比較における形容詞・副詞の尺度としての機能は、比較という文法の本質に関わるものであるが、上述のような考え方では、(a)から(d)へと至る派生過程のどこで、その尺度としての機能が現れるのかがとらえられない。

このような問題点を解消するような派生過程としては、たとえば中村(2009)が示すような考え方が有力である。中村は、

(2) The egg is as big as the ball.

という文について、次のような派生過程を示している。
(下の図式は筆者による。)

- (2a) The egg is as big. The ball is as big.
↓ (as を文の先頭に移動して as ~ as を形成)
(2b) The egg is as big as the ball is big.
↓ (2 番目の big は重複しているので削除)
(2c) The egg is as big as the ball is ~~big~~.
↓ (2 番目の is も重複しているので削除可能)
(2d) The egg is as big as the ball (is).

この派生過程の特徴は、初期段階で

- (2a) The egg is as big. The ball is as big.

という 2 文を想定している点である。

この考え方は、より正確には、形容詞・副詞の程度を表す、音形を持たない要素 x の存在を仮定したうえに成り立つものである。すなわち、

- (2a') The egg is [x big]. The ball is [x big].

という 2 文における 2 つの x が同程度であることが as という語彙項目に具現化されていると考えるのである。

この考え方においては、big という形容詞は最初から尺度として機能しているため、上述の問題は生じない。

さらに、この考え方に従えば、比較級を用いた比較についても、as ~ as による同等比較の場合と平行的な派生過程を想定することができる。たとえば、

- (3) The egg is bigger than the ball.

という文は、次の過程で派生されると考えられる。

- (3a) The egg is [x big]. The ball is [x big].
↓ (1 番目の x を、2 番目の x よりも程度が高いことを表す [-er] に置き換える)
(3b) The egg is [-er big]. The ball is [x big].
↓ (2 文を接続詞 than でつなげる)
(3c) The egg is [-er big] than the ball is [x big].
↓ ([-er big] を bigger に変換)
(3d) The egg is bigger than the ball is [x big].
↓ (2 番目の big は重複しているので削除)
(3e) The egg is bigger than the ball is ~~[x big]~~.
↓ (2 番目の is も重複しているので削除可能)
(3f) The egg is bigger than the ball (is).

as ~ as の場合は接続詞である 2 番目の as が基底となる文に最初から内在しているのに対し、この場合は than は派生過程で加えられると考える点が異なる。しかし、相違はその 1 点だけで、音形を持たない要素 x が -er という接辞として具現化され比較構造を形成する過程は、as ~ as 構造の派生と平行的である。

このように、音形を持たない要素 x を仮定する考え方は、中学・高校段階での英文法としては抽象的で学習者にとって難しいものであるかもしれないが、英語の比較構造について正確に理解するためには必要な考え方であろう。

1. 2. 比較節の構造

前項のような派生過程が正しいとすると、比較節はもと文(節)であったということになる。その点をとらえ、比較節の構造について次のような解説がなされることがある。

He runs as fast as I.

She is more beautiful than I.

を、as me, than me と間違えたそこのアナタ!

この 2 つの文の最後の部分である “as I”

“than I” は、

He runs as fast as I run fast.

(彼は、私が速く走るのと同じくらい、速く走る)

She is more beautiful than I am beautiful.

(彼女は、私が美しいことに比べて、もっと美しい)

と、as と than の後ろに文が続くのが省略された形なんです。

つまり、as I, than I の I は、それぞれ省略された文の主語が残ったもの。しばしば、as I (than I) なのか、as me (than me) なのか迷う人がいますが、「as と than の後ろは主語！」と考えましょう*。

*くだけた表現では、as me, than me も使われますが、as I, than he が文法的には正しい表現です。

(浅羽 2008:196-197)

これは比較節の構造に関する説明として不正確である。実際は、as me, than me は普通の表現であり、as I, than I も使われるが、形式ばった表現である。その代わりに、このように as や than の後に人称代名詞の主格を用いる場合は、as I do や than I am のように助動詞相当

要素を添えるのが普通である。

このことについて、文献をいくつか引いておく。まず、八木 (1987:94-95) は次のような用例を示し、

(4) John is taller than me.

(5) John is taller than I.

(4)のような文は、「意味上は動詞の主語に相当する要素が目的格になっているという理由で規範文法家から非難されるが、これは当たらない。」と述べている。その根拠として、もし(4)が非文で(5)が適格文であるならば、

(6) She left after he left.

の意味を表す英文として想定される次の2文

(7) *She left after he.

(8) She left after him.

において、(7)が適格文で(8)が非文であるはずだが、実際はその逆であることを指摘している。

また、Quirk. et al.(1985)は7次のように述べ、*than I* は *than I am* からの省略ではなく、むしろ *than me* からの過剰訂正 (hypercorrection) ではないかという見解を示している。

The gradience between prepositions and conjunctions also appears in comparative constructions, such as:

I am [1a]

He's bigger than I. [1b]

me. [1c]

With the definition of preposition given in 9.2, *than* is a conjunction in [1a] and [1b], and a preposition in [1c]. However, the choice between [1b] and [1c] is a well-known prescriptive issue in traditional grammar, and it may be argued that *than* is both a conjunction in [1a] and a preposition in [1c], and that *than I* in [1b] is not a reduction of [1a] *than I am* but a hypercorrect variant of [1c] *than me*.

(661)

このような状況を総合した見解として、ワトキンス他

(1997) は次のように述べている。

個人的には、*younger than I* は前世紀の間違った規範的な態度から生まれた非合理的な形だろうと思うが、今でもけっこう使われるので、まずい言い方ではあるが、全くの間違いであるとするのは厳しすぎるかもしれない。

(102)

1. 3. 節型比較と句型比較

前項までで、比較構造の派生過程と、そこから導かれる比較節の構造について言語事実を整理したが、ここで1つの問題が生じる。それは、比較節を導く *as* と *than* の品詞である。

1.2 で見たように、*as me* や *than me* という構造が許される以上、*as* や *than* は前置詞と解釈するのが妥当である。しかし、そうすると、1.1 で示した、2つの文(節)からの派生という考え方では、前項(1)や(5)のような比較節の構造を説明できない。

じっさい、次のような用例は、2つの文(節)からの派生という解釈にはそぐわない。

(9) John is as tall **as six feet**.

(10) John is taller **than six feet**.

このように、*as* や *than* の後に数量表現が続く場合は、派生の元となる文(節)が想定しがたい。八木(前掲)は、このような種類の比較構造を「句型比較構造」と呼び、2文(節)から派生される「節型比較構造」と区別している。句型比較構造の他の例としては、次のようなものが挙げられる。

(11) He ran faster **than the world record**.

the world record は数量表現そのものではないが、数量表現に相当し、比較の基準を示す。

(12) More women **than ever** are working outside the home.

ever や *before* など、漠然とした時を表す表現が *than* の後ろに現れる形は、定型的な表現となっている。

(13) More men **than women** applied for the job.

これについては、

[x many] men applied for the job.
[x many] women applied for the job.

という2文(節)が想定できるかもしれないが、その場合、

More men applied for the job than women.

という語順にはなっても、ここから語順を変更して(13)のようにすることはできない。これは、比較構造の派生過程での削除操作が、あらゆる移動操作の後に行われるためである。したがって、(13)では、最初から **than women** が1つの構成素として作られていると考えるのが妥当である。

(14) A taller man **than Bill (*is)** came into the room.

(13)における考え方を支持する例である。すなわち、Billは(9)の **six feet** や(11)の **the world record** と同様に比較の基準を示しているが、仮に

Bill is [x tall].

を想定して **than Bill is** とした場合、非文になる。このことは、**than Bill** が削除の結果残されたのではなく、最初からこの形で作られたものであることを示している。また、そもそも

A [x tall] man came into the room.
[x tall] Bill came into the room.

という2文(節)を想定すると(14)とは意味が異なってしまう。

(15) He loves the dog more **than her**.

このような例は、しばしば二義的である点が指摘される。すなわち、(15)は次の2通りに解釈できる。(不等号は程度の高低を示す。)

(15a) He loves the dog. > He loves her.
(15b) He loves the dog. > She loves the dog.

(15a)の解釈は、(15)を、次のような2文(節)を想定し

た節型比較構造と見ることで導かれる。

He loves the dog [x much].
He loves her [x much].

いっぽう、節型比較構造を想定する限り、(15b)の解釈を導くことは難しい。つまり、

He loves the dog [x much].
She loves the dog [x much].

から、

(16) He loves the dog more **than she (does)**.

を派生することはできるが、**than she does** が **than her** と変化することが説明できない。やはり、ここでも、**than her** は最初からこの形で構成素をなしていると考えるのが妥当である。

さらに複雑なことに、節型比較構造の中でも、本稿でここまで示してきたような派生過程を経ないと思われる例が存在することを八木(2007)が指摘している。

(17) The sculpture is heavier **than I can lift**.

のような例で、よく使われる構造であるが、派生の元になる2文(節)が想定し難い。かといって、**than** の後は節を成しているので、句型比較構造でもない。

本稿の趣旨ではないので、これ以上の詳細な分類は避けるが、いずれにせよ英語の比較構造は均質ではなく、性質の異なる複数の構造が存在することは明らかである。指導の場面においてもこれらの多様性を適切に扱う必要があるが、そのことに関わる問題を次節で検討する。

2. 英文法教材における比較節の扱い

2. 1. 複雑さが顕在化する比較節

前節で整理したように、英語の比較構造の性質は多様であり、指導場面においてもその多様性に配慮する必要がある。

特に配慮が必要と思われるのは、(15)や(16)のような構造である。すなわち、次の条件を満たす比較節である。

- a) **as** や **than** の後に人称代名詞が用いられている
- b) その人称代名詞が主格の解釈を受ける
- c) その人称代名詞が主格を示す語形を持つ

この構造について配慮が必要である理由は次の通りである。すなわち、節型比較構造を想定すれば、主格を標示する人称代名詞を単独で用いるのが自然であるにも関わらず、言語使用の実態としては主格人称代名詞の後に助動詞相当要素を置くか、あるいは目的格を単独で使用する方が自然である。そのため、節型比較構造を規則として習得しつつある学習者にとっては目的格の使用が規則から外れるものを感じられる一方、句型比較構造を規則として習得しつつある学習者にとっては、人称代名詞の主格の後に助動詞要素を置くことに抵抗が感じられる。このように、この種の比較節は単線的な規則適用を許さないため、学習者にとっては容易でない。

2. 2. 英文法教材における実態

学習者である生徒は、授業においては言語活動を通じてさまざまな構造の使用に習熟することが期待されている。しかし、それと並行して、参考書や問題集などの英文法教材を利用して学習を進めることも多く、それらの教材が生徒の学習に及ぼす影響も小さくない。

そこで、それらの英文法教材において、前項に挙げた

種類の比較節がどのように扱われているかを知るために、以下のような分析を行った。

まず、比較が導入されるのが中学校であるため、中学生を対象とする市販の英文法参考書および問題集 30 種類のうち、比較構造に焦点を当てた章を分析の対象とした。それらに挙げられている用例および練習問題の中で、前項の条件に該当する英文を抽出し、それらの比較節の構造を次の型に分類し、集計した。^①

- ① as + 主格 : e.g.) as I
- ② as + 主格 + 助動詞 : e.g.) as I do, as I am
- ③ as + 主格 + have : e.g.) as I have
- ④ as + 目的格 : e.g.) as me
- ⑤ than + 主格 : e.g.) than I
- ⑥ than + 主格 + 助動詞 : e.g.) than I do, than I am
- ⑦ than + 主格 + have : e.g.) than I have
- ⑧ than + 目的格 : e.g.) than me

集計の結果は表に示すとおりである。(教材ごとの詳細は本稿末の資料に示す。)

表. 中学生向け英文法教材における比較節の扱い

比較節の型	用例・練習問題の数(文)	占有率(%)
① as + 主格	53	27
② as + 主格 + 助動詞	0	0
③ as + 主格 + have	3	2
④ as + 目的格	0	0
⑤ than + 主格	129	66
⑥ than + 主格 + 助動詞	7	4
⑦ than + 主格 + have	0	0
⑧ than + 目的格	2	1

分析対象とした教材の中には、この種の比較節の複雑性を考慮して避けたためか、用例・練習問題がまったくないものが3種類あった。(それらの教材においては、比較節の主語には、固有名詞・普通名詞や、you や it など主格専用の形を持たない人称代名詞が用いられている。)

それ以外の、用例・練習問題が掲載されている教材においては、明らかに①と⑤の型が優先的に用いられていることがわかる。^②

また、比較節の構造と意味について、以下の事項を明示的に説明している教材の数は次の通りであった。

口語において目的格が用いられやすいこと : 3 種類
 目的格の使用によって二義性が生じること : 2 種類
 助動詞相当要素を残すこと : 1 種類

これら以外の教材については、この種の比較節の複雑性には言及せず、用例や練習問題だけが提示されていた。

3. 指導上の留意点

前節において明らかにした教材の実態を踏まえる

と、次の問題点を指摘することができる。すなわち、この種の比較節の性質について明示的な説明がないままに、英語の実態を反映しない用例や練習問題に接し続けることにより、学習者が比較構造について誤った規則を習得する危険性があるということである。

したがって、比較構造の指導にあたっては、この問題点を解消するように留意しなければならない。学習者に提示する用例や言語活動の中で用いる英文を注意深く精選することが求められる。

このとき、比較節の例としてどの構造を示すかということも重要な検討事項であるが、その一方で、比較構造を指導するにあたって、比較節を最初から導入しなければならないのかということも検討する価値のある問題である。じっさい、中学校学習指導要領では、平成10年版においても平成20年版においても、比較については「形容詞・副詞の比較変化」としか規定されておらず、比較節については言及がない。また、検定教科書において扱われるのも、主に句型比較構造か比較節のない例である。

そもそも、形容詞・副詞の比較変化だけを取り上げても、音節の知識や形容詞・副詞の尺度としての意味の理解が求められるため、学習者にとっての負担は低くはない。したがって、比較表現の指導においては、比較節の扱いを後回しにするという考え方も必要であろう。比較節を扱う場合も、検定教科書がそうであるように、句型比較構造を優先的に扱う方が学習者への負担は少ないであろう。

いずれにせよ、2.2 で市販の教材について明らかにしたような問題が生じないように、比較構造の複雑性を踏まえたうえで、指導を注意深く順序立てる必要がある。

(注)

(1) ③⑧において **have** を独立して扱うのは、**have** が一般動詞でありつつ助動詞としての性質も持っており、他の型と容易に同一視できないためである。じっさい、分析した教材においても、他の一般動詞が用いられていない環境において **have** だけが例外的に用いられている例が観察された。

(2) **as** 節よりも **than** 節の例が多いのは、不等比較については **-er** 型と **more** 型で章を分ける教材が多いので、**than** 節の用例・練習問題の総数が **as** 節よりも多くなるという単純な事情による。

[引用文献]

- 浅羽克彦. (2008). 『東大生が書いたつながらる英文法』. 東京: ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- 高沢節子・豊島克己・町田健. (2002). 『depth 英語総合』. 東京: 河合出版.
- 中村捷. (2009). 『実例解説英文法』. 東京: 開拓社.
- 八木孝夫. (1987). 『程度表現と比較構造』. 東京: 大修館書店.
- 八木孝夫. (2007). 「比較削除によらない節型比較文について」. 『英学論考』, 36, 25-32.
- ワトキンス, G・河上道生・小林功. (1997). 『これでいいのか大学入試英語 上』. 東京: 大修館書店
- Quirk, Randolph, Greenbaum, Sidney, Leech, Geoffrey, and Svartvik, Jan. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman

資料. 中学生向け英文法教材における比較節の扱い (教材ごとの詳細)

	教材																														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
①					3	2		1	4	1				2					3	9	3	4	1		2	1	1	7	1	8	
②																															
③	1		1																	1											
④																															
⑤			3		3	4	1	3	10	7		1	1	7	4	2	1	1	9	9	11	8	2	1	6	13	3	11	2	6	
⑥					1		1						1		1		1							1		1					
⑦																															
⑧						1		1																							